

好奇心と社会貢献

理事長 岩 崎 俊 樹

気象学会会員の皆様が気象に関する調査・研究に取り組む動機は何でしょうか？ 私の場合は科学を社会に役立てたいと考え、仕事として気象を選びました。もちろん、役立てるためには、まず現象をよく知らなければなりませんし、もともと、強い興味を持っていました。

大気現象は多くの不思議に満ちています。そのメカニズムを物理・化学の言葉で理解することはたいへん面白いことです。他方、防災や気候、環境に対する社会の関心は高く、その問いかけに誠実に答えることはやりがいのある仕事です。気象学に係わる動機は、自然についての興味と、科学的知見を社会に役立てる意欲に大別されると思います。前者は好奇心、後者は社会貢献、と言えます。好奇心派の目的は自然について科学的知見を得ることであり、それを活用し社会に役立てることが社会貢献派の目的です。両者は両立することが理想ですが、科学的知見に関する価値観の違いが現われることがあります。自然認識としては重要であっても社会にはあまり役立たない知見もあれば、その逆もあります。価値観の立場による相違を理解したうえで、積極的に情報交換することが科学を進歩させるためには必要です。

昨年、ノーベル生理学・医学賞を受賞された東京工業大学の犬隅良典名誉教授は、受賞決定直後のインタビューで、「私は『役に立つ』という言葉はとても社会をダメにしていると思っています」と発言し、話題となりました。犬隅教授は「役に立つ」という言葉が「数年後に企業化できる」と同義語に使われることがあるのは問題だ、と述べています。競争的資金などでは、短期的に成果が出る研究が優先された結果、基礎研究は後回しになります。生理学と気象学では分野が違うので簡単には比較できませんが、気象学のコミュニティでも同様の問題について考えておく必要があるでしょう。

学問にブレークスルーをもたらす研究の多くは、リスクを伴い長い時間を要する基礎研究です。例えば、数値モデル分野においては、準地衡風の大气力学や傾圧不安定論が、その後の数値予報の成功と発展に大きな影響を与えました。また、カオスの発見が予測可能性の理解とアンサンブル予報の実現へと繋がりました。自然の本質を知り技術を見極める基礎研究が応用分野における大きな変革（パラダイムシフト）をもたらしました。好奇心派の研究のみならず、社会貢献派の技術開発にも基礎研究の範疇に入るものがあります。原理的に優れた新技術であっても、実用的には既存の技術を凌駕することができず、いわゆる「死の谷」に遭遇することがあります。死の谷を克服するためには、斬新なアイデアと果敢な実行力が不可欠です。

今日、科学は社会との係わりを無視することはできません。社会は常に科学に新たな問題を提起してきました。社会の期待は学問分野によって異なります。科学の社会との関わりを考える時、それぞれの学問分野の立ち位置と個性を意識します。「社会は気象学に何を期待しているか」「気象学はどのような社会貢献が可能か」考えてみる必要があります。身近な情報を提供する気象学に対し、社会の期待は決して小さくありません。ことに、2011年3月11日の大震災以降、防災に対する関心は極めて高くなりました。昨年（2016年）1月には、多くの学会等が参画し防災学術連携体が発足しました。各学会の災害対策事業は多岐に渡ります。連携体における気象学会の位置は極めて重要で、気象・気候情報の高度化への期待はたいへん大きいと感じます。社会貢献活動を通じて学会の横への広がりを増やしていくことが望まれます。社会からの期待をしっかりと受け止めること、それは気象学の重要な課題の一つであると考えます。

研究の動機は個人の尊厳に属するもので、基本的に自由です。気象学会には好奇心派と社会貢献派の両方が必要です。前にも述べたように、好奇心派と社会貢

献派では科学的知見に対する価値観が違い、持っている情報も違ってきます。価値観の異なる会員が情報を交換し切磋琢磨することで、自然をより深く理解し、社会貢献についての新しい発想が生まれます。会員の多様性は、学問の健全な発展と社会貢献活動の推進のための大きな財産です。また、好奇心派であれ社会貢

献派であれ、学問の進歩させるのはリスクを伴うチャレンジです。学会は、様々な勇気あるチャレンジを生み出す土壌をつくりだしていかなければなりません。今年もまた、学会活動へのご支援をよろしくお願いいたします。